

〈研究ノート〉

家族間コミュニケーションにおける一考察

— 仮想携帯電話の家族間無料サービスという概念を用いた調査票の試み —

菅野陽子

要約

「家族」という言葉を定義することは、簡単ではない。今日の家族変動のなかで各人が頭に描く「家族」の概念はそれぞれ違っている。私たちが「家族」を扱い、研究対象としている「家族支援」の場合も、そのことを念頭において、実践していくべきではないか。また、家族のコミュニケーションの疎通に的をしぼり、その一つの試みとして、「あなたが仮想携帯電話会社の家族間無料サービスに入るとして、家族の5人を選んでください」という調査票を作成した。

この投影法ともいえる調査票の施行結果によって、調査対象者の「家族」と思うメンバーのなかで、携帯電話によるコミュニケーションの多いメンバーが概ね想定できる。学生の家族に関連した授業や家族の支援者の研修会で用いると、「家族」について考察する効果的な手段となる。さらに多様な臨床現場での「家族支援」において、クライアントへこの調査票を施行することにより、クライアント自身の家族間のコミュニケーションの有り様をカウンセラーと共に考えて、支援のヒントを得ることになる。

キーワード 家族、家族支援、携帯電話、家族間無料サービス、投影法

目次

1. 問題と目的
2. 方法と結果
 - 2.1 予備調査A
 - 2.2 予備調査B
3. 考察
 - 3.1 2つの予備調査の考察
 - 3.2 総合的考察
 - 3.3 今後の課題と展望

1. 問題と目的

近年、わが国の家族は激動する社会において、高齢化と少子化および離婚の増加が大きな特徴を示している。岡堂は、家族心理学の立場から「史上まれにみる試練に直面している」と日本の家族の変化と危機を示唆している^[1]。伝統的な多世代同居家族から夫婦家族制が

1947年に選択されて以来、核家族化が急速に進み、家族は縮小化し、孤立傾向があるといわれる。また、自殺者の増加の現象にも目を向けたい。わが国は2000年以降、年間3万人以上という自殺者総数であり、04年には先進国中で最も高い自殺率が報告されている。そして注目したいのは、07年では男女とも、すべての年齢階級で、同居人が「ある」者が多くなっている（厚生労働省「平成20年度版 自殺対策白書」）。特に配偶者関係別の自殺の状況を見ると、総数は男女とも「有配偶者」（男46.9%、女41.9%）が最も高くなっている。さらには、65歳以上の高齢者に限ってみると、自殺者の過半数が家族と同居しているという現象も見られる^[2]。つまり親子の同居や多世代（3世代以上）家族における高齢者の方が、独居の高齢者よりも孤独感を覚えているともいえる。

* 家族の機能

このことは、個人の身体的、心理的および経済等社会的な問題となるいくつかの原因がからんでいるにしても、核家族であろうと複合家族であろうと、日本の家族において、それぞれの孤独感が大きくなっているといえるのではなかろうか。柏木（2003）は、「家族は孤独を癒し心のよりどころ・支えを与えるものと考えられ、孤独は家族とは最も無縁なものとしてきたふしがある」と言及している^[3]。いわば、多くの人々が持つ家族のイメージとして暗黙の了解がされており、逆にいえばその機能が家族に求められない時に、深い孤独感があるといえよう。

* 家族の定義

そこで著者は人々が家族を「孤独を癒し心のよりどころ・支えを与えるもの」ととらえているのか、またそうであれば、コミュニケーションの観点から、家族現象の1つを切り口に現代日本の家族について検討してみたいと考え、その調査をするための調査票を試作することにした。しかし、冒頭で述べたように、第一に今日家族の定義自体が難しい。広辞苑（第4版）の定義によれば「血縁によって結ばれ、生活を共にする人びとの仲間で、婚姻に基づいて成立する社会構成の一単位」とある。しかし、人間科学系の学問領域においてみれば、その定義の統一見解はない。たとえば上野（1994）は、家族の境界を家族同一性（family identity）とよび、家族の境界を検討しているが、今日の家族変動のなかでは既存の家族の定義はどれも有用でないことを前提としている。「あなたは、どの範囲の人々（モノ、生き物、など）を〈家族〉とみなしますか」という質問を作成しているのが興味深い^[4]。

とくに、現在の日本では36.6%の家庭が何らかの動物を飼育しており、65.5%がペットを飼うのが好きだという^[5]（総理府 2009）。愛情によるつながりが「家族」と考えるのが人間から動物にも及んでいる。著者も2年前に愛犬を亡くし、人に「まだ立ち直れなくて・・・」と嘆き、「家族だから当たり前ですよ」といった慰めをもらうことがよくある。こうして家族の一員と認められたペットは、介護や葬儀も人間同様に、手厚く扱われてきている風潮がある。

* 投影法を用いた調査票

これらをヒントに、著者は調査票における〈家族〉を調査者が家族を定義せずに、調査協

力者に「彼／彼女自身の家族メンバーであり、かつコミュニケーションが相互にかわされている人が誰なのか」をなるべく自由に選択できるような質問をすると興味深いのではないかと考えた。「はい」「いいえ」という2択でも、いくつかの選択肢のなかから答えを選ぶ質問紙法ではなく、投影法の手法を用いて、「あるもの（コミュニケーションのツール）を媒介として家族メンバーを選ぶ」という設問に選択されたメンバーが、いわば調査協力者の考えるコミュニケーションの多い家族メンバーかそれに相当するメンバーであろうと想定した。そして、動物も含めると要因が複雑になるので、人間に限定するために言語的コミュニケーションと設定することで、答えが動物になるのを前もって排除した（孤独を癒すのは、ペットが最も効果的かもしれないが）。

1つのツールを選択するとそのツールではこぼれてしまう危険性もはらむが、現代の日本では携帯電話の普及が相当であり、直接会話とメールの双方のコミュニケーションが充てられるため、適当と思われた。また、「仮想電話会社」にしたのは、現実では家族メンバーがそれぞれ契約している電話会社が異なっていると、家族間サービスに入っていないことも考えられ、調査協力者がそういったしぼりと関係なく、なるべく単純に選択できるようにと考案した。

以上の経緯から、「あなたが仮想携帯電話会社codomoに家族間無料サービスに入るとして、5人選んでください」という質問をする調査票を試作し、2種類の予備調査を行った。また、そのメンバーは「あなたとの関係」を右の（ ）内に記述するとした。1つは「家族心理学」の授業において、学生に家族メンバー間のコミュニケーションについて考察させるための調査Aであり、もう1つは子育て支援者（以下、支援者と記述）に「家族支援」に関する講座において、「家族」についての話題提供と、研究調査の協力を兼ねた調査Bである。それぞれ2回行った合計結果を報告し、この調査票の試作について検討を試みたい。

2. 方法と結果

2.1 予備調査A

方法

調査協力者 大学生 86名（2回の合計）が調査対象である。講義時間内の演習として一斉に行い、時間内に回収した。まず個人で質問事項に記入し、その後各人の結果をグループで討議をし、振り返りシートとして提出するというものであった。

結果

表1-①に登録したメンバーが男女別に示されている。もっとも多いのが親族ではない「仲間・友人」で106（123.0%）、1名につき1人以上選んでいることになる。次は親族で「同胞」の90（104.0%）で、複数のきょうだいを選ぶ者が多かった。一般的に1人しかいない親族として最も多いのが「母親」の72（83.7%）であり、次に「父親」の57（66.2%）であった。正確に把握してはいないが、全員独身で「配偶者」はなかったが、「恋人」を選んだ者が8（9.3%）いた。その棒グラフが図1-①である。

表1-②は、5人のうち登録した人数を示している。5人が最も多く66（76.7%）、ついで4人の11（12.8%）であり、最も少ないのが3人で9（10.5%）であった。その割合を円グラフにしたものが図1-②である。

表1-① 大学生の家族間無料サービスに登録したメンバーの一覧表

その他N/A (2)

	実数	母親	父親	同胞	祖母	祖父	親族	恋人等	仲間・友人	配偶者	子ども
女性	51	37	31	47	11	4	15	6	78	0	0
男性	35	35	26	43	6	6	7	2	28	0	0
合計	86	72	57	90	17	10	22	8	106	0	0

(義兄1) 注) 知人→友人欄へ

表1-② 大学生の家族間無料サービスに登録した人数比

5人	4人	3人	2人	1人	0人	合計
66	11	9	0	0	0	86

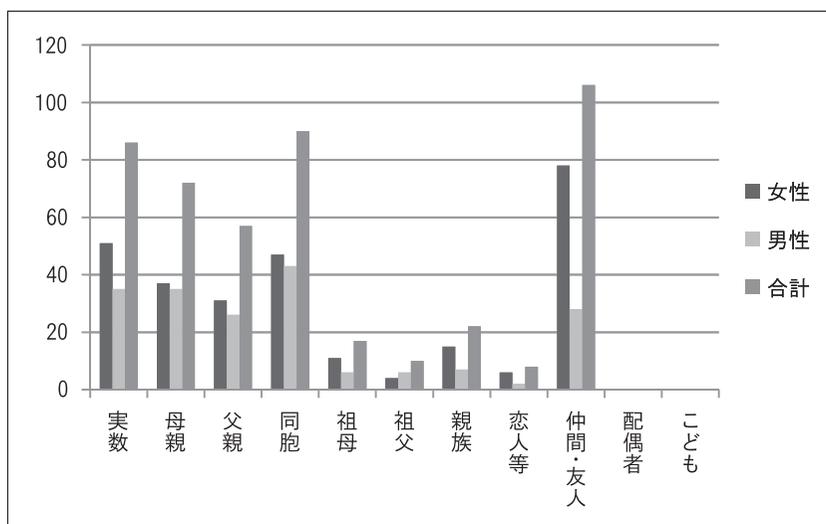


図1-① 大学生の男女別登録メンバー一覧表

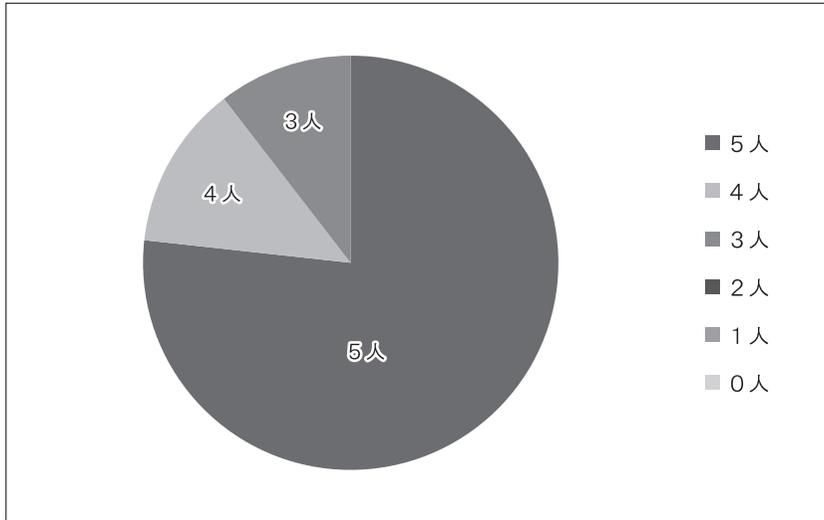


図1-② 大学生の登録人数比

2.2 予備調査B

方法

調査協力者 支援者（首都圏近郊のK県とS市主催の子育て支援者のための講座の受講生）に「家族支援」について講義をする際、「家族」についてワークのひとつとして学生と同様のグループ討議を実施した。その際の調査票は無記名式である。実施後、著者から家族研究のためのデータ集め（単純統計処理を説明）の協力を願い出て、了承を得られた者から回収した。

結果

支援者の男女別に、登録メンバーを世代（20代～60代までの5区分）で分類したものが表2-①である。もとよりこの調査協力グループは、35と標本がかなり小さいので世代別の詳細な分析は避けるが、特徴としては「配偶者」を登録したものが60代女性、40代女性で100%、50代女性および30代女性はそれぞれ87.5%、98.6%というように、かなり高い割合であった。表2-②は、男女合計の登録メンバーと人数を示している。最も登録人数が大きいのは「こども」43（138.0%）で、次に「配偶者」31（88.5%）ついで「母親」23（65.7%）であった。以下、人数が減じるが「同胞」と「義親子（こどもの配偶者や配偶者の親）」が16（45.7%）で、「父親」は7（20.0%）と「母親」に比してかなり少数であったのも特徴的であった。その男女合計でみた登録メンバーとその数量を棒グラフに表したものが、図2-①である。

また、同様に男女合計して5人のうち登録する人数をみたものが表2-③である。最も多いのが5人で28（80.0%）であり、4人から2人が2と少数ながら同数で、1人が1あった。図2-②がその人数比を円グラフに表したものである。

表2-① 支援者の家族間無料サービスに登録したメンバーの男女世代別一覧表

女性：35

年代	実数	配偶者	子ども	母親	父親	同胞	親族	義親子	義同胞	仲間・友人
60代	1	1	2	0	0	0	0	2	2	0
50代	8	7	16	2	0	6	2	0	0	0
40代	14	14	14	11	4	7	2	7	3	0
30代	9	8	9	7	2	0	0	7	0	0
20代	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
合計	32	30	41	21	6	13	4	16	5	0

男性：3

年代	実数	配偶者	子ども	母親	父親	同胞	親族	義親子	義同胞	仲間・友人
60代	2	1	2	1	0	2	2	0	0	0
20代	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0
合計	3	1	2	2	1	3	2	0	0	0

注) 血縁にある親族

注) 義親子とは、子どもの配偶者や配偶者の親など

表2-② 男女合計

	実数	配偶者	子ども	母親	父親	同胞	親族	義親子	義同胞	仲間・友人
合計	35	31	43	23	7	16	6	16	5	0

表2-③ サービスに登録する人数

5人	4人	3人	2人	1人	0人	合計
28	2	2	2	1	0	35

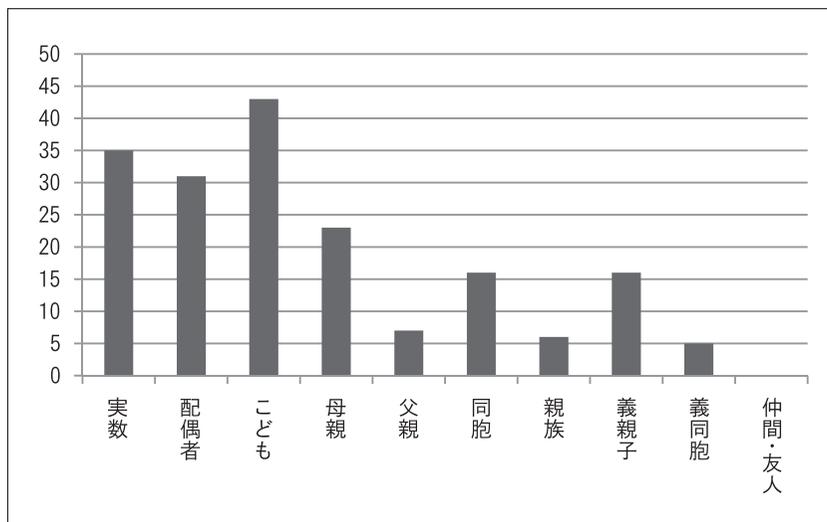


図2-① 支援者の男女合計登録メンバーの一覧表

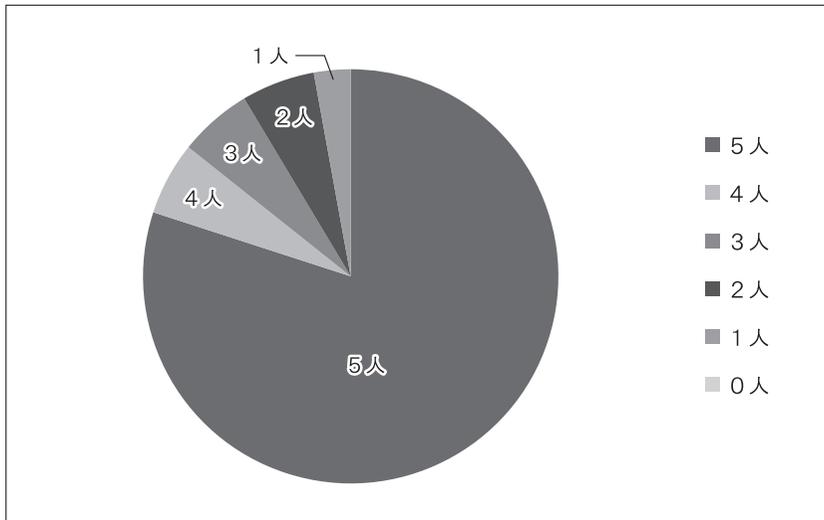


図2-② 支援者の登録人数比

3. 考察

3.1 2つの予備調査の考察

前述したように支援者のデーターが少なく、大学生との比較にしても無理があるので、比較検討は難しい。しかしながら、両者の登録メンバーを並べた一覧表が表3-①で、その人数比が表3-②であり、その棒グラフが図3-①であるが、これらを眺めると、明白なのは大学生には「配偶者」と「子ども」が0で選ばれていないこと、親族以外の「仲間・友人」が最も多く選ばれたことは反対に、支援者には「子ども」が最も多く、ついで「配偶者」が選ばれていて、「仲間・友人」は0であったことである。ただ、「配偶者」は1人のはずであるが、「子ども」は複数いる場合があるので、実際の「配偶者」の登録される割合は高いといえよう。

このことから、まず大学生が全員未婚で（恐らく）子どもがいない（万が一いたとしても幼子と思われる）ということで、「配偶者」と「子ども」が彼らの選択にはないことと、「仲間・友人」が「家族間」と限定されてもなお選択するという、家族に対するイメージが親族を超えている、あるいは仲間や友人の方がより親密であるなどの、ひょっとして世代間の違いが表れているとみてよいかもしれない。なお、今回の予備調査では、大学生は平均20代前で支援者は平均して40代ということになるからである（正確な年齢については双方不問）。その他の登録メンバーの人数比に関しても、世代が上がる毎に支援者の彼らの両親の存命率は低くなること、また祖父母は0であったが存命か否かとは別に携帯電話を使用しない世代ということも考慮すべき要因となるが、本予備調査はそれらを無視しても、上述したような顕著な現象もみることができ、より多くの標本を集めていけば興味深い結果を見ることができると想定している。なお、サービスに登録する人数の大学生と支援者との違いは、

表3-③に示され、両者の合計の人数比が図3-②に示してある。支援者では5人中2人と1人と少ない登録数の者がわずかに存在している。これらの差は、やはりこのデータ数ではいえないものの、この観点でも今後のデータ集計の結果に関心もたれる。

表3-① 支援者と学生の男女別登録メンバーの一覧表

女性：83

年代	配偶者	子ども	母親	父親	同胞	祖母	祖父	親族	義親子	義同胞	恋人	仲間・友人
60代	1	2	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0
50代	7	16	2	0	6	0	0	2	0	0	0	2
40代	14	14	11	4	7	0	0	2	7	3	0	0
30代	8	9	7	2	0	0	0	0	7	0	0	0
20代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大学生	0	0	37	31	47	11	4	15	0	0	6	78
合計	30	41	57	37	60	11	4	19	16	5	6	80

男性：3

年代	配偶者	子ども	母親	父親	同胞	祖母	祖父	親族	義親子	義同胞	恋人	仲間・友人
60代	1	2	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0
20代	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0
大学生	0	0	35	26	43	6	6	7	0	1	2	28
合計	1	2	37	27	46	6	6	9	0	1	2	28

N / A = 2

表3-② 支援者+大学生の登録人数の割合比

実数を100とした時の%

%	配偶者	子ども	母親	父親	同胞	祖母	祖父	親族	義親子	義同胞	恋人	仲間・友人
支援者	89	123	65	20	45	0	0	17	31	14	0	0
大学生	0	0	83	67	104	20	11	25	0	0	9	123

表3-③ サービスに登録する大学生と支援者の人数比

人数	5人	4人	3人	2人	1人	0人	合計
学生	66	11	9	0	0	0	86
支援者	28	2	2	2	1	0	35
合計	94	13	11	2	1	0	121

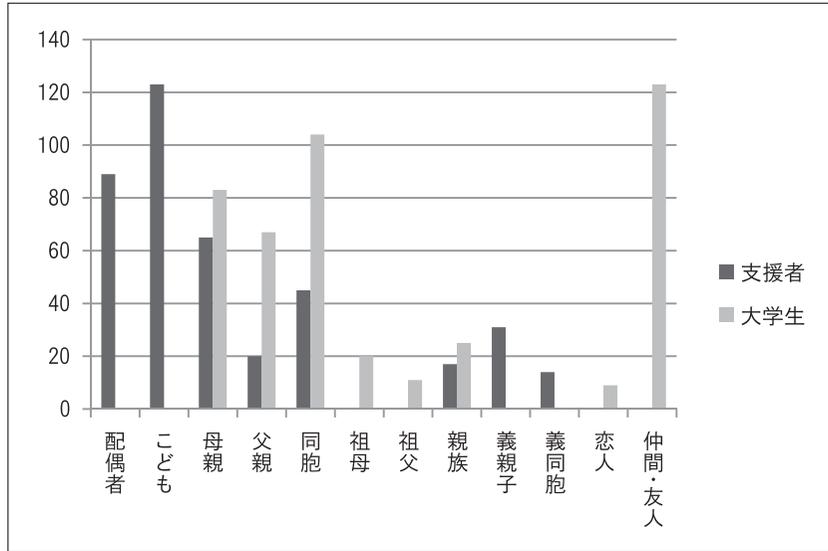


図3-① サービスに登録する各メンバーの人数比 (大学生対支援者)

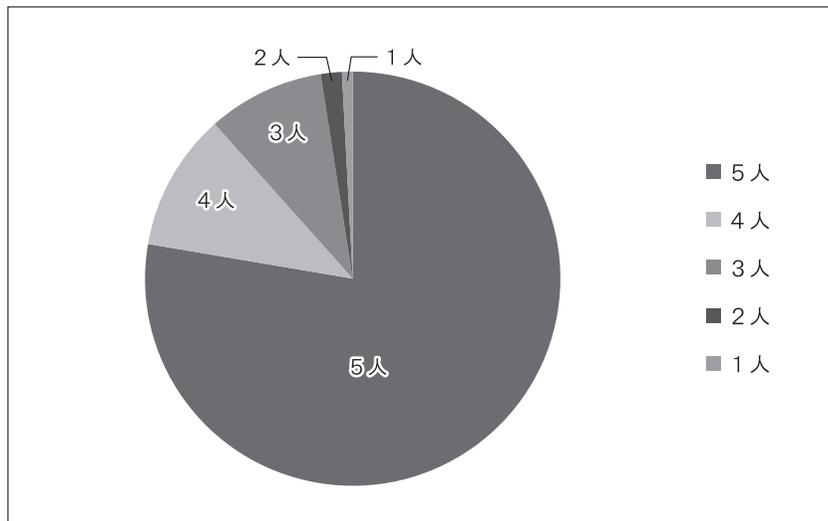


図3-② サービスに登録する人数比 (大学生+支援者)

3.2 総合的考察

*フィードバックの方法

大学生は授業にて記入した後、グループ討議において1) 学生の彼ら自身の「気づき」、たとえば「母親は全員入っている」「家族より友人の方が多い」といった数字の結果と2) 何を学んだか、学生に多かったのは「なんだかんだ言いながら、みんな家族を大切に思っている」などだが、自由記載で「振り返りシート」に記入させる。なかには「登録の順番でだ

れが大切かわかる」という著者の気がつかなかった点を指摘してくれたものもあった。これは記述順番の分析も興味深いことを示唆するもので、今後のヒントになった。

次の授業で、資料として学生に「結果一覧表」が渡され、調査者からのフィードバックは一応完了したが、それをもとに、より深い話し合いがされるとなおよいであろう。

支援者の方は、講座のなかで記述し、話し合いがされたが、1回性の講義のため、振り返りシートではなく、純然たる調査票であった。しかしながら連続講座ゆえ、登録メンバーの一覧表の形で結果を受講生にわたるよう講座担当者に送付した。その後の受講生からの反応は調査者には不明であるので、講座中にもう少し丁寧に講師（調査者）から受講生（調査協力者）にフィードバックできたらよかったと感じている。

* 調査票の持つ意味

この調査票の特徴は、すでに述べているように「投影法」の1種である。それにより、調査協力者の質問に対する「反応」の自由度が高いことである。支援者の30代くらいの女性から次の質問があった。「夫とはいつも直接話すので、携帯電話の登録が必要ないのですが」というもので、著者は「では、そのようになさってください」とした。コミュニケーションがよくても登録するとは限らないという例である。しかしながら、「存命か否か」や現実がどうなのかも「仮想携帯電話会社」ということで、調査協力者に判断を任せることも特徴としてみた。

しかし、この調査票を個人のレベルで見えていく時には、注意がはらわれるべきかもしれない。大学生の多くが母親を登録しているが、登録していない者は母親との携帯電話でのコミュニケーションが必要ないかもしれないし、仲が良くないのかもしれないし、あるいは死別か離別しているかもしれない。グループ討議においては、調査者の配慮が必要であろう。今後の研究の在り方であるが、無作為の標本を多数集めて、量的研究をすれば、それらの配慮は困難であるが、質的研究であれば、それらの正確な情報を得てから分析していくべきと考える。予備調査の結果、著者としてはどちらの方向にも関心があるが、個人の研究のため少しずつ標本を増やしていく現状のなかで、方向を定めていきたい。

3.3 今後の課題と展望

量的研究を進めるとするならば、標本の収集方法としてインターネットや携帯電話を利用したアンケート方式が考えられる。その場合は、質問紙法にすると収集しやすいが、それならば、「仮想携帯電話会社の家族間無料サービスに登録するメンバー」ではなく、直接に「家族のなかでコミュニケーションをよくとるメンバーの順位やコミュニケーションをとるかどうか」の質問をすればよく、この調査票の意義が薄まる。また、家族の役割について「あなたは家族が癒しを与えますか」や「あなたは家族のなかで孤独を感じますか」という質問をすればよいのかもしれない。それゆえ、この調査票は量的研究には向いていないという疑念もあるだろう。その点が課題である。

それでは質的研究の応用として、この調査票は有意義かどうかを考えたい。もとより、著

者は本大学こども学部の学部長である大久保秀子教授を代表とする「カナダ家族支援研究会」のメンバーに加えていただいている経緯もあり、カナダの家族支援について学ぶ機会を得ている。昨年9月には、伊志嶺美津子教授を団長とする学生と支援者引率の訪加団に参加し、五十嵐裕子講師とともに、ライアソン大学の研究者たちとの会議に参加することができた。そのなかでも特に著者の興味をひいた研究^[6]が、School of Early Childhood EducationのMehrunnisa Ali, Ph. D., Patricia Corson, Ed. D., Elaine Frankel, Ed. D. 3博士の“The Family Narrative Approach: Reframing Services”であった。これはカナダに移民してきた貧困の家族あるいは障害を持つこどものいる家族のニーズへ応えるための公的サービス支援者の支援能力を増大することが第一の目的とするプロジェクトである。この研究の中心は家族の物語であり、1冊のマニュアルと1本のDVDを含む訓練材料である1パッケージが基本となっている。このパッケージは、文脈で変わるサービス支援者が、不利益な環境にあるこどもとその家族について、どのようにより学ぶことができるか、また彼らがパッケージに従ってどのように実践していくかを示している。

3博士の研究は、非常によく計画された大規模なプロジェクトで、実践的なナラティブ・アプローチの手法である。詳細は別の機会に譲るが、家族療法という狭い世界で使用されていた「ナラティブ」という言葉も、ここ10年で心理、医療、看護へと領域を広げていき、ナラティブ・セラピーからナラティブ・アプローチへと成熟していったのであるが、カナダの家族支援の研究にも応用されていることを、肌で感じた。

著者は臨床心理士の立場から、実はさらにさかのぼること10年、1990年に出版された1冊の心理療法の本^[7]で初めてナラティブという言葉を知ったのである。そこに、文学者の大江健三郎がコメントを書いているが、カウンセリングとナラティブをうまく結びつけている示唆に富んだコメントであったので印象に残ったのである。大江は「ナラティブの、人間の行為としての特徴をいえば、それはある時間、話を続けていくということなのです。持続的に語ることによって、ある過程を具体的に自分のものにする。その仕方がナラティブなのです。いいナラティブは、それを聞く人間に語り手と同じくある時間を充実したものとして生きたと感じさせるものです。それは生きる過程の具体化といってもいい。」と説明している。

このことは、家族支援における家族の語りに耳を傾けること、臨床場面でクライアントの語りを傾聴することにより、家族が、またクライアントが「どんな主題を語ったかというよりも、どのように語りながら自分は生きたか」と感じていくことに通じるであろう。

彼ら自身の言葉で語られた語りから、支援者が彼らにフィードバックしていく過程で、彼ら自身と支援者自身の気づきと学びが大切であると思う。そのひとつのツールとして、本調査票が役割を果たす可能性もあると信じている。

謝辞

本調査に協力していただいたK県、S市の子育て支援講座の受講生の皆様と浦和大学こども学部の学生の皆様に深く感謝いたします。また家族支援の研究においては、浦和大学の

変多くのヒントをいただいた「カナダ家族支援研究会」の先生方に、またライアソン大学訪問の機会を与えていただきました浦和大学に、ここに厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- [1] 岡堂哲男（長谷川浩編集）、『人間関係論』、医学書院、東京、pp186-198、2009年
- [2] 厚生労働省、平成20年度版「自殺対策白書」、ホームページhttp://www8.cao.go.jp/jisastutaisaku/whitepaper/w-2008/html/honpen/part1sl_1_13
- [3] 柏木恵子、『家族心理学』、東京大学出版会、東京、p114、2003年
- [4] 上野千鶴子、『近代家族の成立と終焉』、岩波書店、東京、1994年
- [5] 総理府、動物愛護に関する世論調査、ホームページ、2009年
- [6] Mehrunnisa Ali, Ph. D., Patricia Corson, Ed. D., Elaine Frankel, Ed. D. “The Family Narrative Approach: Reframing Services” p1, 2008
- [7] 大江健三郎（河合隼雄編著）、『事例に学ぶ心理療法』、日本評論社、東京、p235、1990年

参考文献

1. 武藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ [編] 『質的心理学』新曜社、東京、2007年
2. 野口裕二、ナラティブ・アプローチの10年、「家族療法研究」Vol.26 No.2 金剛出版、東京、2009年

Summary

On Communication among Family Members
— Questionnaire Using the Concept of Free Service for Family Members
Offered by an Imaginary Mobile Phone Company —

Yoko Sugano

It is not easy to define 'family'. Each individual has a different concept of 'family' with today's changeable families. Should we not keep it in mind in our practice when we deal with 'family' and study 'family support'? I targeted the communication among family members and wrote a questionnaire asking, 'Suppose you used a free service for family members offered by an imaginary mobile phone company, which five members of your family would you choose?'

We can estimate how much mobile phone communication the subject has among members of the group considered 'family', by looking at the results of this questionnaire, which can be called a projection method. If we use this in a class concerning the students' families or a seminar for family support staff, it will be an effective means to study 'family'. Furthermore, by conducting this questionnaire in various clinical practices with clients in 'family support', the client can think about his/her own communication among family members with the counsellor and can gain clues to needed support.

Keywords Family, Family Support, Mobile Phone,
Free Service for Family Members, Projection Method

(2009年10月13日受領)